

ジヨウノギ

今井一隆

直樹 なおき 真緒 まお 浩三 こうぞう 美緒 みお 輝男 てるお 麻美 あさみ 洋輔 ようすけ

(39) 信用金庫勤務
(41) 浩三の妻
(48) 大工
(43) 輝男の妻
(45) 建設会社勤務
(25) 洋輔の妻
(35) 大学准教授

奈緒	なお	(3 8)	直樹の妻
畑山	はたけやま	(3 2)	町役場勤務
道子	みちこ	(2 4)	旅館の仲居
奥泉	おくいずみ	(4 3)	写真家
男	(マサキ)	(2 5)	中学教師
女		(2 5)	男の妻・中学教師
女将		(5 5)	旅館の女将

※麻美と女は同一の女優によって演じられること。

プロローグ

滝のある町。

そこに営む古びた温泉旅館。「旅館」というより「旅籠」の趣。黒光りする板張りの床に、ビニールのスリッパが並べ置かれてある。壁に「大浴場」などを示す矢印のプレート。

上手前に帳場のカウンター。その上に置時計。脇に、額装された「書」の色紙。中央に一組のソファセット。テーブルの上にガラスの灰皿。

下手に二階へ続く階段。

玄関のガラスの引き戸に宿の名前が、おもてから見て読めるよう、つまり、こちらから見ると左右逆さまに、こう書かれてある。

蘇来翁

舞台上の明かりはそのまま、客電だけが暗くなる。

今、玄関のガラス戸をガタガタ開けて、一組の若い男女が旅行鞆を手に現れる。

男 女 男 女 男 女 男

……段差（に、気をつけて）。

え？

段差。

あ、うん。

（奥に）すいませーん。予約しといた、野内ですけどお。……すいませーん。
あっ！（段差で、ガクンとなる）
？

女、よろけて男の背中を押す。

女 男 女 男 女 男

大丈夫か？

あ痛た……。

くじいたのか？

大丈夫。

だから、言ったのに。気をつけろよ。

……。ほんとに、ここなの？

男 え？ ああ……。 (メモを取り出し、確認) 3の6の4。橘旅館。……間違いはないよ。

女 ……。

男 (もう一度、奥に) ごめんください。どなたか、いらっしやいませんか？ ……すいま
せーん。

女将の声 はい。

男 いた。

女 うん……。

男、ロビーに上がる。

男 ほら。(と、スリッパを)

女 ありがとう。

男、ソファに座り、寂れた館内を見回す。

男 けど、なんていうか……よくいえばレトロ、悪くいえば……。

奥から女将、現れる。

女将 はいはいはい……。

男 あ、どうも……。 (立ち上がる)

女将 いらつしやいませ。えっとお……？

男 野内やないですけど……。

女将 はい？

男 野内です。先月、ネットで予約しといた……。

女将 ……ああ！ はいはい。あれ、ヤナイ様ってお読みするんですか。

男 え？

女将 てつきり、ノウチ様かと。

男 ……。

女将 ふりがなが文字化けしてて。

男 ああ……。

女将 あ、あたくし、女将のたちばな橘たちばなでございます。どうぞよろしくお願いいたします。
男 どうも。

女 お世話になります。

女将 でもまた、ずいぶん、お早かったんですね？

男 ええ。たまたま予定より一本早い電車に乗ったら、後の連絡がうまくいって……。 (女に)

なあ？

女 うん。

女将 そうですか。

男 他は、まだ、誰も……？

女将 ええ。

男 ちよつと早すぎたかな。

女将 なんだ、そうですかあ。前もってお電話、いただければ、ねえ……。

男 いや、お気遣いなく。駅ですぐ、タクシー、拾えましたから。

女将 お部屋の準備が……。

男 はい？

女将 まだ、準備、できてないんですよ。今年入った仲居が今日からお盆休みで、人手が足りなくて。

男 ああ……。

女将 まーったく今が一年で一番忙いっちゃんしいときなんだに、ほんつと最近の若い子は！

男 ……。

女将 前もつてお電話いただいてたら、早めにご準備しときましたのに……。

男 すいません……。

女将 (女に) あ、どうぞ、お掛けなつてください。

女 はい……。

女将 今、お茶を……。

女将、奥へ去る。

男 ……。あんまり忙しそうにも見えないけどな。

と、女将、戻つてきて、

女将 何か？

男 え？ あ、いや、何も……。

女将
……。

女将、再び、去る。

男
女
男
女
男
女
男
女
男
（女将が去りきつたのを見届けて）座ったら？
ん……。（座り）……あ。

？

滝の音がする……。

え？

ほら。

滝？

うん。

……。

（耳を澄ます）

滝の音。

女
ね？

男 ……ああ。

女 きつと、パンフレットの写真で見たやつよ。

男 パンフレット？

女 遊歩道の開通式の。

男 ああ……。え、でも、そうかな？

女 え？

男 だって、あれは、もつとずっと山の奥だろ？

女 そう？

男 そうだよ。

女 そんなこと、ないよ。

男 あるある。俺、地図でちゃんと下調べしてんだから。

女 ……。

女将、お茶を持って戻ってくる。

女将

どうぞ。（と、湯飲み茶碗を置く）

女 あ、すみません。

男 女将さん。
女将 はい。
男 これって、何の音ですか？
女将 はい？
男 これ……。
女将 ……ああ。滝ですよ。今度、近くに遊歩道が通った……。
女 (男に) ほらあ、やっぱり！
男 え、そうなんですか？
女将 それが、何か？
男 あ、いや……。
女将 写真、ありますよ。
男 え？
女将 滝の写真。えっと、たしか……。
男 あ、いえいえ、今は……。
女将 ……そうですか？
男 でも、意外と近いんだな。地図で見ると、遠く感じたけど……。

滝の音。

三人、その音に耳を澄ます。

男 そうだ。どっかで、お土産、買わないと。(女将に)何か、オススメとか、ありますか？

女将 ああ、そうですね。人気なのは、温泉まんじゅうとか、おせんべい……。

男 ー、ありきたりだなあ。

女将 でしたら、ちよつと変わったところで、蜂の子の佃煮とか。

男 ハチノコ？

女将 スズメバチの幼虫です。お酒のおつまみとか、炊き込みご飯なんかにしても美味しいですよ。

男 へえ。

女 (気持ち悪いので)いいわよ、温泉まんじゅうで。

男 そ？ つまんなくない？

女 つまんなくていいの、お土産なんて。

女将 温泉まんじゅうでしたら、ウチでも注文、うけたまわれますよ？

男 ああ、そうなんですか。

女将 こしあんと、つぶあんと……あ、ご試食、なさいます？

男 できるんですか？

女将 ええ。

男 じゃあ。

女将 ちよつと、お待ちください。今、お持ちします。

女将、奥へ去る。

男 何個、買ってけばいいんだ？ 校長と、教頭と、学年主任と……。 (と、指を折る)

女 いいわよ、主任は。

男 え、どうして？

女 シマに一個ずつで、いいよ。

男 そう？

女 いいって。

男 そう……。

滝の音。

男 ……石碑、見に行ってみるか。

女 セキヒ？
男 城跡しろあとの石碑。どうせまだ部屋には入れないし、今日はこれから何もすること、ないんだし。
女 ああ。まあ、いいけど……。
男 バスで行けんのかな？

男、公衆電話の上に貼られたバスの時刻表を見に行く。

女 いらっしやるかな？

男 (振り返り) 何？

女 お義母さん。

男 え？

女 明日、遊歩道の開通式。

男 ……ああ。どうかな。親父の葬式にも、顔出さなかったくらいだし……。

女 ……。

男 だいたい離婚して二十年だもん。もう、完全に他人だよ。

女 招待状は読んでくれてるよね？

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

さあ。

直接、会いに行こうとは思わなかったの？

だって、招待状、みんなの分、まとめて出しちゃったし……。

そうじゃなくて。今まで一度も、会いに行こうと思ったこと、ないの？

……おふくろに？

うん。

こつちから？

うん。

思わないよ。

どうして？

どうして……思うわけ、ないだろ？

だから、どうしてよ？ 意地張ること、ないじゃない。

べつに、意地なんて……だいいち、むこうには、むこうの家庭があるんだし……。

会いに行ったらいいのよ。

会ってどうすんの？

おやこ
母子じゃない。

男 こっちは、ろくに顔も覚えてないんだぞ？

女 ……。

男 ……。ていうか、女将さん、戻ってこねえな。(と、奥に目をやる)

女 あたし、ちよつと、見てくる。

男 あ、いいよ。俺……。

女 見てくる。

女、奥へ去る。

男 ……。(再び腰を下ろす)

と、テーブルの下に目を落とす。屈んで、オセロの駒を拾い上げる。そしてそれを掌で弄ぶ。放っては受け、また放っては、受け――。

滝の音。

流れ落ちる水の音は、「除幕式」のとりおこなわれた二十年前と変わりが無い。

音楽。ラヴェルの「ハイドンの名によるメヌエット」

溶暗。

前景から二十年前の晩夏。

ソファにスーツの男と着物の女。

男は町役場の畑山、女はこの旅館の仲居、道子である。

道子 ……ちよつと待ってください。もう一度、最初から整理させてもらっていいですか？

畑山 ええっ?! またあ？

道子 最初、お客さんは、一人1万円、お支払いになったんですよね？

畑山 ……そう。

道子 てことは、三名様で、3万円。

畑山 うん。

道子 で、仲居が、その宿代3万円を預って、帳場に持ってたところ、女将さんが「2万5千円にまけとくわ」と。この時点で、5千円、浮いたわけだ。うん。……で、その浮いた5千円のうち2千円を、仲居が、つい魔が差して、懐に入れてしまった、と……。そゆことですよね？

畑山 「つい、魔が差して」かどうかはともかく、ま、そういうこと。

道子 こっからなんだいね、問題は。(と、腕まくり)

畑山 (電卓を叩く) 残りの3千円を、三人の客に千円ずつ返すと、最初、一人1万円払って、千円戻ってきたんだから、差し引きで9千円払ったことになるに? ここまでいい?

道子 (領きながら) ……差し引き、9千円……。

畑山 (電卓を叩く) それが三人分だから、 $3 \times 9 \parallel 27$ で?
さんくにじゅうしち

道子 2万7千円。

畑山 それに、仲居さんがちよろまかした2千円をたすと?

道子 2万9千円。

畑山 だに?(でしよう?)

道子 ええ。

畑山 だけど、最初に払った三人分の合計は?

道子 ……3万円。

畑山 じゃあ、あと千円はどこに消えたんでしょーか?

道子 ……。

畑山 制限時間、10秒。

道子 (電卓を取り返し、叩く)

畑山 5秒。4・3・2……。

道子 はい。(と、挙手)

畑山 (そのノリに渋々つきあい) はい、ミツちゃん。

道子 どっかに落とされたとか？

畑山 ……そういう、あれじゃないんだに。

道子 でも、これ、正解したら、ほんとにニルヴァーナのチケット、取ってもらえんですよ？

畑山 だから、そう言ってるに。

道子 絶対？

畑山 もちろん。そのかわり、正解しなかったら、宴会で、お銚子一本サービスね。

道子 (腕組みし) うーん。わかった！ 女将さんとお客さんが、実は裏で繋がってる……。

畑山 だから、そういうあれじゃ、ないんだってば。

と、外から麻美が入ってくる。

道子 あ、お帰りなさいませ。

麻美、靴を脱ぎ捨てる。ロビーを横切り、階段へ向かう。

と、妻を追って、夫の洋輔、入ってくる。

洋輔 (麻美に駆け寄り) おい、麻美、待てよ！

麻美 ほっといてって言ってるでしょう?!

洋輔 ほっとくわけにいかないだろう？

麻美の腕から血が流れている。

道子 ど、どうしました？

洋輔 いや……ちよつと、虫に噛まれたらしくて……。

道子 虫？

洋輔 蛭に……。

道子 蛭!?

洋輔 ほら。(と、腕を掴む)

麻美 放して！(腕を振り解く)

洋輔 麻美!

畑山 ちよつと、見してもらって、いいですか？(と、麻美の腕を取る)

麻美・洋輔 ……。

畑山 (傷口を見て) ああ、こりゃ消毒しといた方がよかんべ。ミツちゃん。マキロン。

道子 はい？

畑山 マキロン。

道子 あ……はい。マキロン、マキロン……。

道子、奥へ去る。

畑山 (麻美に) いやいや、心配いりませんよ。田舎じゃよくあることなんですから。傷口、よー

く水で洗って……。あ、洗面所の場所、わかります？

洋輔 わかるか？

畑山 その廊下、まっすぐ行って……。

麻美 わかるから。

麻美、去る。

洋輔 ……。

畑山 ……。

洋輔 あ、どうも、すいません。

畑山 あ、いえ。煙草の火、近づけてやるといいんですよ。

洋輔 え？

畑山 蛭。そうすれば、苦しんで、自分から離れて落ちるから。

洋輔 ああ……そうなんですか。

畑山 あ、そうそう。野内先生、今、ちよつといいですか？

洋輔 はあ。

畑山 明日のことで、ちよつと、ご相談したいことが……。

洋輔 何ですか？

畑山 いやあ、実は、町長が……。

そのとき、着物を着た女・奈緒、入ってくる。

奈緒 (ハンカチで顔を扇ぎながら) ふう、あつふう。……あ、洋ちゃん！

畑山 (話を遮られ) ……。

奈緒 しばらくう。(少女のように手を振り)

洋輔 ああ。

奈緒 62段。

洋輔 え？

奈緒 その石段。あんまり長いんで、思わず数えちゃったわよ。

洋輔 ……。

奈緒 さすがにキツイわ、こんな恰好だと。

洋輔 (畑山に) あ、姉の、奈緒です。三姉妹の、一番下の……。

畑山 ああ、どうも……。

洋輔 (奈緒に) こちら、役場の畑山さん。

畑山 はじめまして。畑山です。「畠山重忠」の「畠山」……ではなく、土佐の畑山温泉の、畑山

です。

奈緒 はあ。

洋輔 畑山さんには、石碑の建立から今度の除幕式まで、いろいろお世話なつて……。

奈緒 それは、どうも、ご苦労様です。

畑山 いえいえ、こちらこそ、先生には、お世話になりっぱなしで。お父様の代から足かけ十年、

こんな山ん中まで、何度もご足労いただきまして……。

と、麻のジャケットを着た直樹が、両手に大きな旅行鞆を提げ、入ってくる。

直樹 おい、奈緒、こまかいの持って……あ、洋輔くん、どうも……。

洋輔 ごぶさたしてます。

直樹 元気だった？ ちよつと、痩せたんじゃない？

奈緒 で、何？

直樹 ん？

奈緒 こまかいのって？

直樹 ああ。タクシー、つり銭、持ってないんだと。

奈緒 もうっ。いくらよ？（がまぐちを出す）

直樹 ああ、えつと……。いくらだっけ？

奈緒 （がまぐちの中を覗き）あ……。あたしも万札しか、ないわ。洋ちゃん、ある？

洋輔 ああ。

畑山 あ、僕、ありますよ。

洋輔 いや……（財布から千円札を数枚取り出し、直樹に）これで、足ります？

直樹 （受け取り）悪いね。

クラクションの音。

直樹 はいはい、ただ今……。 (と、鞆を持って)
洋輔 あ、直樹さん、荷物……。

しかし直樹は荷物を持って去ってしまった。

洋輔 駅ついたら、電話してって言ったじゃん。
奈緒 ん？

洋輔 言ってあったろ？ 女将さんが車で迎えに行くからって……。
奈緒 したわよ。

洋輔 え？
奈緒 電話、したわよ。「五分で着く」って言うから待ってたのに、十分経ってもこないんだもの。
あんな扇風機もない、掘っ立て小屋みたいな無人駅で、じとーっと待ってるこっちの身にもなってるよ。

洋輔 ……じゃ、今頃、女将さん、駅で姉さんたちのこと探してんじゃないの？
奈緒 探して、いなけりや、帰ってくるでしょ。

洋輔 そりや、そうかもしれないけど……。
奈緒 で、他のみんなは？
洋輔 ん？
奈緒 まだ、来てないの？
畑山 あ、みなさん、今、滝に……。
奈緒 タキ？
畑山 ええ。
洋輔 夕飯まで、やること、ないからって。
奈緒 滝って、山伏が打たれる……？
洋輔 いや、見て回ってるだけだよ。
奈緒 そりやそうでしょ。
洋輔 ……。
奈緒 じゃあ、マサキも？
洋輔 え？ あ、いや、マサキは……。
奈緒 何？
洋輔 置いてきた。
奈緒 滝に？！

洋輔 いやいや、違うよ。麻美の実家に……。

奈緒 ああ……。でも、どうして？ 連れてくればよかったのに。

洋輔 だって、無理だよ。明日の除幕式は、山頂まで登んなきゃならないんだし……。

奈緒 会いたかったのになあ。ねえ、もう、喋る？

洋輔 え？

奈緒 マサキ。喋る？

洋輔 ああ……。そりゃ喋るよ。幼稚園だもの。

奈緒 見たかったなあ、喋るマサキ。

洋輔 ……。

道子、マキロンを持って戻ってくる。

道子 あの、これ……。 (奈緒を認めて) あ、いらっしやいませ。

奈緒 どうも。お世話になります。 (と、会釈)

道子 うわ！ (と、飛びのく)

奈緒 ？

畑山 な、何？ どしたん？

道子 ……こ、ここ。(と、自分の襟足を指す)

畑山 え？

道子 (奈緒を凝視し)

奈緒 あたし？

道子 (頷く)

奈緒 何？

道子 ヒル……？

一同 ……。

奈緒 ヒ……え？！ やだ、ちよつと、洋ちゃん、取つて！

洋輔 え、俺？

奈緒 早く！

洋輔 無理無理無理……。

畑山 (奈緒に) 動かない！

一同 (固まり) ……。

畑山、奈緒の背後に回る。

畑山 ……。なあんだ。シヤクトリムシだに。

道子 え？

畑山 ミツちゃん、人騒がせなんだから。

道子 すいません……。

畑山 まったく……（奈緒に）あ、もうちよっと、頭、下げてもらえます？

奈緒 （素直に頭を下げる）……。

畑山 （指ではじき）あ……。

一同 ？

畑山 （中に）落ちちゃった……。

奈緒 （背中を反らし）ヒーツ！

畑山 あ、動かないで、動かないで！

奈緒 ……。

畑山 あーあ、もう、動くから……。 （と、奈緒の着物の襟をひろげ、背中を覗き込む）

そこへ、直樹、戻ってくる。

直樹 ああーい、しょつとお。 （と、荷物を置き）ふう……。何してんの？

畑山 え？ あ、いや……。あ、いた、いた。（と、つまみ）

直樹 え？

畑山 これ。シャクトリムシ。

直樹 は？

畑山 ハハハ……。

畑山、思いつきでつくった「シャクトリムシの歌」を歌いながら、外へ去る。

直樹 ……。

洋輔 （道子に）ありがとう。（と、手を伸ばす）

道子 え？ ……ああ……。 （マキロンを渡す）

と、帳場の電話が鳴る。

道子 あ、はいはい……。

道子、帳場の奥へ去る。

直樹 他のみんなは？

洋輔 はい？

直樹 まだ、来てないの？

洋輔 ああ、今、ちよつと……。

奈緒 （ハンカチで首を拭いながら） 滝だつて。

直樹 タキ？

奈緒 ん。

直樹 滝つて、山伏が打たれる……？

奈緒 見て回ってるだけよ。

直樹 ああ。

洋輔 ……夫婦だなあ。

直樹・奈緒 え？

麻美、階段裏から戻ってくる。

直樹 あ、麻美ちゃん。どうも。

麻美 ……どうも……。

奈緒 ……。(会釈)

直樹 しばらく。

麻美 ご無沙汰してます。

直樹 どう？ その後。変わりない？

麻美 はあ……。

直樹 ちよつと痩せたんじゃない？

麻美 え、そうですか？

直樹 あれ？ 今日、マサキは？

奈緒 連れてくるわけじゃないでしょう？ 除幕式、山頂まで登らなきゃならないのに。

直樹 ああ、そっか……。

洋輔 腕、見せてみる。

麻美 いいわよ。

洋輔 出せよ。消毒してやるから。

麻美 自分でできるから。(と、マキロンをひったくる)

麻美、二階へ去る。

洋輔 (それを見送り) ……。
直樹 どうかしたの？
洋輔 あ、いや……。

そこへ道子、戻ってくる。

道子 野内様。お電話です。
洋輔 え、俺に？
道子 はい。
洋輔 誰？
道子 女将さんからです。
洋輔 …… (奈緒に) ほらあ。だから言わんこつちやない。
奈緒 え？
洋輔 俺が謝んなきゃなんないんだから。
奈緒 ……。

洋輔、帳場に去る。

直樹 何、謝んの？

道子 (直樹に) あ。お荷物、お部屋の方に運んじやいますね。

直樹 ん？ ああ、よろしく。

道子、荷物を持って二階へ去る。

と、畑山、外から戻ってくる。

直樹 (畑山と目が合い) ……。

畑山 あ、申し遅れまして。私、役場の観光課の畑山と申します。(と、名刺を渡す) 「畠山重忠」の「畠山」……ではなく、土佐の畑山温泉の、畑山です。

直樹 (名刺を) 見れば、わかるよ。

畑山 はあ……。あ、そうだ、あと、これ。(鞆から藁半紙を取り出して配る) どうぞ。はい、どうぞ……。

直樹 何、これ？

畑山 式次第です。

直樹 シキシダイ？

畑山 明日の、除幕式の。

直樹 ああ。

奈緒 この藁半紙が？

畑山 はい。皆様の援助とご協力で、なんとか、ここまでこぎつけることができました。
……。 (無然としている)

直樹 (畑山に) これは？

畑山 はい？

直樹 ここ。

畑山 どこですか？

直樹 ここだよ。なんか、マジックで、ぐちやぐちや、ってしてあるけど……。

畑山 ああ、それ、実は……。

と、洋輔、戻って来る。

洋輔 大変だよ。

直樹 どしたの？

洋輔 滝で……。

直樹 タキデ？

洋輔 浩三さんが、蜂に刺されたって……。

奈緒 ハチ？

滝の音、高鳴る。

静止した一同の姿を残し、溶暗。

シヤクシヤクと氷を砕く音。

明かりがつくと、ソファに直樹、奈緒、テーブルを挟んで、輝男、その妻・美緒。一同、カップのかき氷を食べている。

同日、午後。

奈緒 ……で、他のみんなは？

輝男 (氷を頬張り、首を横に振る)

直樹 まったく？

輝男 (氷を頬張り、今度は首を縦に振る)

美緒 浩三さんだけ、集中的に狙われて……。

奈緒 なんて、浩三さんだけ？

輝男 (氷を飲み込み) ……だって、一人だけ、黒いのなんか着てんだもん。

奈緒 黒いの？

美緒 黒いシャツ、着てたの、浩三さん。

奈緒 いや、だから、なんで黒いシャツ着てると浩三さんだけ……？

直樹 習性だよ。

奈緒 シューセー？

直樹 スズメバチの習性。黒いの攻撃すんの。

奈緒 そうなの？

直樹 そうだよ。

輝男 (また氷を頬張り) へえういえ、いはほほはうほん。

直樹・奈緒 はい？

美緒 「テレビで見たことあるもん」て。

直樹・奈緒 ああ……。

美緒 ほら、あなた、ボタボタこぼして……。 (と、ハンカチで拭う)

輝男 ん……。

直樹 しかし、大工が、あれじゃ、仕事になんないよな。

と、奥で、浩三の悲鳴。

一同 (階段裏の方に目をやり) ……。

奈緒 大丈夫なのかしら？ 浩三さん。

美緒　　すぐに、お医者さんに連れてってもらったから。不幸中の幸いだったわよ、女将さんの車が通りかかってくれて。
直樹　　そうですかあ。

二階から畑山、階段を下りてくる。

畑山　　……しかし災い転じて、とでもいいですか、こちらとしちやあ、むしろ好都合なくらいです。

続いて洋輔、下りてくる。

洋輔　　はあ……。

畑山　　造り酒屋の御曹司つったら、ここいらじゃ実質、町長より格上ですから。町長なんて、選挙で負ければ、ただの田舎の百姓だに。ハハハ……。

洋輔　　……。

輝男　　あ、ねえ、役場の、えー……。

畑山　　はい？

輝男 えっと……。

美緒 畑山さん。ハタケヤマシゲタダの……。

畑山 いやいや、畠山重忠ではなく、畑山温泉の……。

輝男 どっちでもいいけどさ、スズメバチの巣、駆除しといてよ？ やだよ、除幕式で犠牲者出んの。

畑山 あ、はい。それは、もう、即刻駆除するように、衛生課の方に言っときましたから。

輝男 あ、そう。

畑山 (洋輔に) ここは、この畑山を助けると思って、ひとつ……。

洋輔 ……わかりました。

畑山 ありがとうございます！ じゃ、明朝、予定どおり8時に、マイクロバスで、お迎えにあがりますんで。

洋輔 はい。お願いします。

畑山 では、みなさま、明日の朝8時に！

一同 はーい。

美緒 アイス、ごちそうさまでした。

畑山 いえいえ。では、明日。

畑山、一礼して去る。

洋輔 ……。(溜息)

美緒 どうかした？

洋輔 ん？ んん……。

奈緒 二階で、畑山さんと、何話してたの？

洋輔 来賓の「祝辞」、町長がキャンセルしてきたって……。

一同 え？

奈緒 どうして？

洋輔 選挙で除幕式どころじゃないんだと。

奈緒 そんな、今さら……。

直樹 じゃ、来賓の「祝辞」、どうすんの？

洋輔 代わりに、商工会の副会長にお願いしてあるって……。

直樹 商工会？

洋輔 ええ。

輝男 しかも副会長って。ずいぶん格が落ちたなあ。あ。それでか。

美緒 え？

輝男　アイスの差し入れ。袖の下。

美緒　袖の下……？

輝男　賄賂だよ、ワイロ。

美緒　ああ。

奈緒　結局、舐められてんのよ、あたしたち。あの「式次第」にしたって……お姉ちゃん、どう思
った？

美緒　どうって？

奈緒　今どき、あんな藁半紙。バカにしていると思わない？

美緒　ああ……。まあ、たしかに、手作り感にあふれてるわね……。

奈緒　あふれるにもほどがあるわよ！

美緒　……。

奈緒　寄付金、ふんだくるだけ、ふんだくつといて……。百歩譲って、その副会長にお願いするに
してもよ、式次第くらい、ちゃんと作り直せばいいじゃない。ていうか、作り直すべきでし
よう？　今はワイプロっていう便利なマシンだってあるんだもん。

直樹　マシンで……。

奈緒　それを、あんな、おぎなりに、マジックでぐじゃぐじゃって……。

一同　……。

奈緒 ひとの背中にシャクトリムシ、落としやがるし……。
一同 え？

階段脇に、真緒、現れる。

一同 (そちら振り返り) ……。
真緒 (ハンカチで手を拭い) ……。何？
一同 (視線を外し) いや……。

と、浩三、現れる。頭に医療用のネットをかぶり、両腕の肘から指の先まで包帯をぐるぐる巻きにしている。

一同 (かける言葉が見つからず) ……。
浩三 ……。ウオシュレットだわ。
一同 ああ……。
真緒 ……。 (ハンカチで手を拭う)
浩三 (真緒に) ……何だよ？

真緒 え？ 何って、何が？

浩三 んな顔すること、ないだろ？

真緒 んな顔って？

浩三 しようがないだろ？ 一人で用が足せないんだから。

真緒 あたしは、昔からずっと、こんな顔ですけど？（美緒に）ねえ？ お姉ちゃん。

美緒 えっ？

真緒 そうでしょ？ 奈緒ちゃん。あたし、子供の頃から、こんな顔よね？

奈緒 え、ああ、まあ……。

真緒 （浩三に）ほら。こんな顔なんですッ！

浩三 ……。

そのとき、外で、トラックのエンジン音。「バックします、バックします」と機械の声。

道子・女将の声 オーライ、オーライ……ストロップ！

機械の声、「バックしま……」と途切れる。

やがて玄関から道子、入ってくる。

道子 すいません。和太鼓、宴会場に運びたいんで、ちょっと、男手、貸してもらえますか？

男一同 ああ……。 (これ幸いと立ち上がる)

直樹 あ、いやいや、浩三さんは……。 (と、制す)

浩三 ……。

輝男 よし、行こう。

洋輔・直樹 はい……。

道子に先導され、浩三を除く男一同、外へ去る。

洋輔 あ、浩三さん、ここ、どうぞ……。

浩三 ……ん……。 (座り) いっ……。! (と顔をゆがめる)

奈緒 大丈夫ですか？

浩三 んん……。

美緒 痛みます？

浩三 まあ……。

真緒 ……。

奈緒 あ、アイス、冷蔵庫にありますけど……。

真緒 いいの、いいの。余計な水分与えないで。またすぐトイレ行きたくなるんだから。

奈緒 ああ……。

浩三 ……。

美緒 でも、よかったわよ、大事に至らなくて。（真緒に）ねえ？

真緒 二度目があぶないんだって。

奈緒・美緒 え？

真緒 一度刺されると、体内になんとかって抗体ができて、二度目に刺されたとき、アレルギー反

応で、呼吸困難とか心機能低下……場合によっちゃあ、死んじゃうこともあるんですって。

美緒 まあ、こわい。

浩三 ふん。きいたふうなことを……。

真緒 聞いたんですよ、病院で！

浩三 ……。

二階から、麻美、下りてくる。

美緒 あ、麻美ちゃん。でかけるの？

奈緒 (振り返り) ……。

麻美 ええ、ちよつと、駅前の薬屋さんに……。

美緒 薬？

麻美 酔い止めのお薬、買いに。明日の、バスの……。

美緒 ああ。

麻美 あ、ついでに、何か買ってくるもの、ありますか？

美緒 (奈緒に) 何か、ある？

奈緒 べつに……。

美緒 浩三さんは？

浩三 いや、とくに……。

美緒 真緒ちゃんは？

真緒 パンパース。

美緒 え？

真緒 紙おむつ。成人用の。

美緒 ああ。

浩三 ……。

美緒　じゃあ、麻美ちゃん、悪いけど……。
麻美　あ、はい……。

麻美、去る。

浩三　（それを見送り）……やっぱ、まだ、引きずってんのかなあ？

真緒　え？

浩三　麻美ちゃん。あの大学生のこと。

美緒　大学院生でしょ？

浩三　え？　ああ、そっか。大学院生。

真緒　え、どうして？

浩三　だって、洋輔さんとマトモに目、合わせようとしないだろ？

奈緒　そりゃそうよ。あんなことがあったんだもの。一度ならずや、二度までも。

一同　……。

奈緒　だから、あたし、言ったのよ。とつとと離婚したほうがいいって。それが二人のためでもあ

るんだし。やり直すなら若いうちのほうがいいんだから……。

真緒　でも、そう簡単にはいかないわよ。

奈緒 ほら、またすぐそうやって、真緒ちゃんは麻美ちゃんの肩持つ！

真緒 べつに肩なんか持っていないけど……。

奈緒 フツー、する？ マサキみたいな小さい子、家に置いたまま駆け落ちなんて。しかも相手は洋ちゃんの教え子の大学生でしょ？

美緒 大学院よ。

奈緒 バツカみたい！

美緒 バカってことないでしょう！？ 大学院だから大学院で言ったんじゃない。

奈緒 麻美ちゃんのことよ。

美緒 ああ……。

真緒 でも、麻美ちゃん、今度こそキツパリ別れるって言ったんでしょう？ ねえ？

美緒 ん？ うん……。

奈緒 どうだか。二度あることは三度あるっていうし。

真緒 三度目の正直ともいうわよ。

奈緒 だと、いいけど。……あーあ、着慣れないもん着るから、肩こっちゃった。あたし、ちよつと上で、着替えてくるわ。

奈緒、二階へ去る。

美緒 ……皮肉なもんね。

真緒 え？

美緒 欲しいところには、授からないで……。

真緒 ……。

と、外で、砂利を踏む音が近づく。

女将の声 慎重にお願いします、借り物なんで、慎重に……。

輝男の声 ちよつと、ちよつと、これ、一回、下ろさない？

直樹の声 いや、一気に行っちゃいましょう。

輝男の声 ええっ？！ あ、直樹くん、押さないで、押さないで……。

直樹の声 あ、すいません。で、どこ？

女将の声 はい？

直樹の声 宴会場って……。

道子の声 ああ、こっちです。

輝男の声 あ、痛っ！

道子の声 あ、そこ、段差、気をつけてください。
輝男の声 先に言ってよ！
道子の声 すいません……。

声、遠くなる。

美緒 そうだ。あたし、明日、除幕式で着る服、吊しとかなきや。

真緒 ああ……。

美緒 (浩三に、かき氷を) いりますか？

浩三 ン……。 (手を伸ばす)

真緒 (睨んで) ……。

浩三 あ、いや……。

美緒 そう。じゃあ。

美緒、二階へ去る。

と、外から洋輔、戻ってくる。

洋輔 麻美、どこ行きました？

浩三 え？

洋輔 今、出てったみたいだけど。

浩三 ああ……駅前に……。

真緒 薬屋だって。

洋輔 薬屋？

真緒 うん。

洋輔 何しに？

真緒 薬、買いにでしよう？

洋輔 ……そう。そうだよね。 (外に目をやる)

真緒 何？

洋輔 ん？ いや……。

洋輔、再び外へ去る。

浩三 ……洋輔くんもよくないよ。

真緒 え？

浩三 足手まといだなんてさ。

真緒 何？

浩三 言ってたろ？ さつき麻美ちゃんが蛭に噛まれたとき。足手まといな女だって。

真緒 ……。

浩三 あのとくだって、そうだよ。

真緒 あのととき？

浩三 家出先から麻美ちゃんのこと連れ戻したとき。みんなの前で、「飼い犬に手を噛まれた」っ

て……。そう言っただけ？

真緒 ……強がって言っただけよ。

浩三 そうだろうけど……。

滝の音。

真緒 で、あなたは、どうするつもりなんですか？

浩三 ん？

真緒 和太鼓。着々と準備、進んでるみたいですよ？

浩三 ああ……。

真緒　でしゃばって、余計なこと言ったりするから……。

浩三　べつに、でしゃばってないだろう？

真緒　でしゃばったでしょう？

浩三　余興がカラオケだけじゃ盛りあがりに欠けるって、洋輔くんが言うからさあ……。

真緒　そこで頼まれもしないのに自ら和太鼓の企画なんか提案するのを、デシヤバルっていうんです！

浩三　……誰か、代わりに叩ける人、いないかなあ？　あ、直樹くんとか、どうだろ？　彼、たしか九州男児だろ？

真緒　それが太鼓と、なんの関係があるんです？

浩三　（べつに、ないので）　んん……。

真緒　言っとくけど、辛子明太子って「太鼓」じゃありませんからね？

浩三　んなこた、わかってるよ。

真緒　……。

浩三　んむ！（と身体をくねらせる）

真緒　な……何？　痛むの？

浩三　痒い……。

真緒　え？

浩三 背中。搔いてくれ。
真緒 ……。(溜息)

真緒、浩三の背後にまわり、襟の隙間に手を突っ込む。

浩三 もっと、右。

真緒 ……こう？

浩三 あー、ちよい、行き過ぎ。……おろ。そこそこ。

真緒 ……。

浩三 おまえ……。

真緒 何？

浩三 代わりに叩いてくれない？

真緒 ヤよ！

浩三 アタタタ……。もっとやさしくやってくれよ。

真緒 (手を引き抜く) あたしから、洋ちゃんに言ったげましようか？

浩三 え？ なんだ、洋輔くん、太鼓叩けんの？

真緒 断るんですよ。

浩三 断る？

真緒 ごめんなさい、するの。

浩三 ……今さら？

真緒 だって、しょうがないじゃない。

浩三 しょうがないって…おまえ、簡単に言うけど、親族みんなに知らせちゃってんだぞ？

真緒 じゃあ頭突きで鳴らします？

浩三 ……おまえという女は…。

真緒、かき氷のカップを片付け、奥へ去る。

と、宴会場から和太鼓の音。

浩三 ……。

浩三、立ち上がる。包帯をした手で、和太鼓を叩く仕草を試みる。

浩三 アタタ…。

和太鼓の音を残り、溶暗。

前景から二十年後の同時刻。

「プロローグ」の翌日。

男が扇子を扇ぎながら耳にケータイを当てている。

男 ……いや、違います。橘旅館です。タ・チ・バ・ナ。

どうやら通話状態が悪いらしい。電波の入る場所を求め、あちこち歩き回りながら話している。

男 はい？ ……ああ、なんだ、名前って、私の……。野内です。いえ、マ、じゃなくて、ナ。ヤマイじゃなくて、ヤ・ナ・イ。 ……そうです。ええ。 ……で、どのくらい、かかります？ ……いや、だから、そうじゃなくて、時間……。

奥から女将、布巾を手に現れる。

女将 あれっ?!

男 ああ、そうですか。わかりました。じゃ、お待ちしています。ええ、ロビーにいますから。はい。よろしく。(電話を切る) あ、おはようございます。

女将 ノウチさま。

男 ヤナイです。

女将 一緒に行かなかったんですか?

男 え?

女将 開通式。遊歩道の……。

男 ああ。バス、乗り切れなくて。

女将 え?

男 小っちゃいの、来ちゃって。マイクロバス。役場の手違いで……。

女将 もしかして、また、畑山さん?

男 え?

女将 役場の人。担当、畑山さんでしょう?

男 ああ。でしたっけ?

女将 (溜息) あの人、いっつもそうなのよね。何やらせてもツメが甘いつていうか……。

男 はあ……。

女将 だけど驚きましたわ。だって、まさか、あのときの……。何年前だったかしら？ あの、除幕式。

男 二十年、ですね。僕が5歳のときだから……。
女将 二十年?! そっかあ、もう、そんなになりますか。あたしも年取るわけだわ……。

滝の音。

女将、布巾でテーブルを拭く。

男、帳場のカウンターの前へ立ち、額装された「書」に目を留める。

男 (扇子を扇ぎながら「書」を読んで) 五月さつき待つ 花はな橘たちばなの香かをかげば 昔むかしの人の袖そでの香かぞする——。これは……? 伊勢物語です。

女将 伊勢物語……。

男 先代の女将が、地元の有名な書道家の先生と同級生で……。

女将 どういう意味ですか?

男 橘の花の香りをかいだら、昔なじみの人を思い出した、っていう歌です。お客様にも、この

宿のことを思い出していただけるようになって……。

男
でもなんで、そんなこと、思い出すんです？

女将
え？

男
なんで、橘の花の香りで、昔なじみの人のことを……？

女将
なんでって……そういうことになってんです！

男
はあ……。

女将
昔、一人の男がありました。その男は宮仕えが忙しく、家を顧みずに過ごしていました。（ソ

ファに座る）ある日、男の妻は、以前から優しく言い寄っていた他の男について、家を出て行ってしまいました。

男
……。 （ソファに座る）

女将
さて、この初め夫であった男が、勅使として宇佐神宮へ参る道中、ある国で接待の宴があ

りました。接待役の男の妻が、どーもどつかで見えたことあんな、と思つたら、なんと、出て行った、自分の元妻ではありませんか！　そこで男は言いました。「女あるじに土器とらせ

よ。さ、あらずば飲まじ」。そうして妻が、杯を差し出したところ、男は、つまみの橘を手にして、こう詠んだのです。「五月待つ　花橘の香をかげば　昔の人の　袖の香ぞする」。

男 ……。

女将 女は、ハッ！ と、この人の元を去ったときのことを思い出し、やりきれねえ思いから、世を捨て、尼となって、山に籠もった……とのことです……。 (泣く)

男 あ……。 (拍手)

女将 先代の女将からの受け売りですが……。

と、二階から女、手にゴム鞆を持って下りてくる。

女将 あ、おはようございます。

女 おはようございます。

男 ……タクシー呼んだよ。5分で来るつて。

女 そう。

女将 ……何ですか？ (と、ゴム鞆を)

女 ああ、鏡台の裏に……誰かの忘れ物かしら？

女将 あ、すみません……。

と、帳場の奥で電話が鳴る。

女将 あ、はいはいはい……。

女将、帳場の奥へ去る。

女 (空気が抜けて) ベコベコ……。

男 (扇子をしまい) ……。貸して。

女 ん？

男 それ。

女 ああ。

女、男に鞠を投げる。

男 ……ガキの頃、よく団地の駐車場で、ボール遊び、してき。おふくろ、コントロール悪いん

だよ。それで俺が、球、受け損ねてき。拾いに走って、戻ってきたら……いないでやんの、

おふくろ。俺、今度はそういう「遊び」なんだと思ってる。かくれんぼだって。で、車の下、

覗き込んだり…… (笑い) 猫じゃないっつーの。なあ？

男 女

……。

(外に目をやり)……天気、持つかなあ？ 午後から雨降るようなこと、言ってたけど……。
ま、テープカットするだけしな……。

男、女に鞠を投げる。

女、それをキャッチする。

喉、渴いたな。

え？

女 男 女 男

なんか飲む？ ジュースか、なんか。自販機で、買ってくる。
うん……。

男、外へ去る。

女

(鞠を見つめ)……。

滝の音。

溶暗。

夜。

外は雨。

浴衣姿の輝男と直樹がソファでオセロゲームをしている。

直樹

(駒を置き) はい、どうぞ。

輝男

うーん、そうきたかあ……。

直樹

最近、どうですか？

輝男

ん？

直樹

建設業界は。

輝男

キツイよ。バブルがはじけちゃったから。

直樹

そうですか。

輝男

直樹くんとは？

直樹

うちも、同じですよ。

輝男

そう？ 景気よさげに見えるけど。

直樹

まさか。

輝男 だって、金、貸す方じゃない。信用金庫なんて。

直樹 そういう問題じゃないでしょう？

輝男 子供いないから、そう見えんのかなあ。

直樹 ……。

輝男 じゃあ、これでどうだ。(駒を置く)

直樹 あ、そこ、気づいちゃいました？

輝男 気づくさ、そりゃ。

直樹 ここもですよ。

輝男 え？ あ、そっか、そっか。(と、裏返す)

直樹 ふふ……。

輝男 ？

直樹 かうど、もくらい。

輝男 ああつ！ きったねえ……。

直樹 きったねえって、そういうゲームじゃないですか。

輝男 そこ取られたら、斜め全滅じゃん。

直樹 全滅ですよ。輝男さん、目先の損得にとらわれすぎなんですよ。

輝男 ……。

玄関の引き戸が風にガタガタ鳴る。
窓に揺れる木の影。

輝男 (外に目をやり) ……風、出てきたね。

直樹 (外に目をやり) ええ……。

輝男 ……。

直樹 ……輝男さんの番ですよ？

輝男 わかってるよ。あ、そうだ、直樹くん。あとで、これ、ちょっと覗いてみない？ (と、ポケ

ットからチラシを出す) 小川ビル地下一階。

直樹 はい？

輝男 駅前で、看板持ちにもらったんだけど……。(と、チラシを)

直樹 (受け取り、読んで) 〈娯楽の殿堂。関西、関東、北九州より一流のトップダンサー来演。

あたしに会わずに帰っちゃイヤ〜〉……て、ストリップ?!

しっ! ……このチラシ持ってくと、千円引なんだってさ。

直樹 ……輝男さんも、好きですねえ。

帳場から、洋輔、現れる。

直樹 (あわててチラシをポケットにしまう)

輝男 (洋輔に) どうだった？

洋輔 やっぱ、空港で足止めくってるそうです。台風直撃で……。

輝男 そりゃ、いつまで待ってもこないわけだ。

直樹 で、いつ飛ぶの？ 飛行機。

洋輔 今のところ、運行再開の見通し、立たないって……。

直樹 じゃ、除幕式、間に合わないんじゃない？

輝男 つーか、できないでしょ。明日も、こんな天気じゃあ。

洋輔 一応、天気予報では、台風、今夜のうちに北へ抜けるって話なんですけど……。

道子、現れる。

道子 (後ろを振り向き、同僚の仲居に) ……うん、あと、お酒、お願い。

洋輔 (道子に) 電話、どうもありがとう。

道子 あ、いえ。宴会場にお夕食のご用意できました。

洋輔 ああ。

輝男 仲居さん、小川ビルって、わかる？

道子 小川ビル？

輝男 うん。

道子 ああ。ストリップ劇場の？

洋輔 え？

輝男 あ、や……。

道子 (洋輔に) で、まだ、お見えになってないお客様の分は……？

洋輔 ん？

道子 夕飯……。

洋輔 あ！

道子 ？

洋輔 それ、キャンセルってわけには……。

道子 キャンセル？！

直樹 台風直撃で、飛行機、飛ばないんだって。

道子 ……そう言われましても、こちらとしては、もう準備しちゃって、あと、お出しするだけな

んですけど……。

輝男 だよ。電話一本してくれりゃあいいのにねえ。

洋輔 誰かしら電話してらだろうって、みんなして思い込んでたみたいで。

輝男 これだから、九州人は……。

直樹 何ですか？

輝男 いやいや。(洋輔に)とにかく、こういうことになっちゃったんだから、しょうがない。いる人間で、食えるだけ食おう。直樹くん、この勝負、ノーカンね。

直樹 は？

そのとき、奥から、浴衣姿の美緒、あたふたと駆けてくる。

美緒 (輝男に) あなた、あなた……。

輝男 どうした？

美緒 でた、でた……。

輝男 でたって、何が？

美緒 幽霊……。

一同 幽霊？

美緒 お風呂場の、窓に、もわくん、て……。

輝男 ……んな、バカな。なんかの見間違いだろ？

美緒 なんかって？

輝男 なんかつたら……なんかだよ。

直樹 もしかして……覗き？

一同 え？

美緒 やだ……。 (浴衣の前を重ね直す)

輝男 いや、ないない。それはないよ。

直樹 どうしてですか？

輝男 だって、誰がわざわざ好きこのんで、こんなおバサンのヌード覗くの？ どうせなら、もつ

と若くてピチピチの狙うだろ？

直樹 そんなの、わからないじゃないですか。

輝男 直樹くん、マニアだね。

直樹 そうじゃなくて、結果論でしょう？

輝男 ケツカロン？

直樹 若くてピチピチかどうかなんて、覗いてみるまで、わからないんですから。覗いて、はじめ

て、「あー、なんだ！」 って、なるんじゃないですか。

輝男 ああ、まあ確かに……。

洋輔 影が映ったんじゃないですか？

輝男 カゲ？

洋輔 自分の影が、窓ガラスに……。

輝男 あ、それだよ、それぞれ！ 言うじゃないか、「幽霊の正体見たり枯れ尾花」って。

美緒 枯れ尾花？

輝男 思い込みだと言ってんだよ。まったく人騒がせなんだから。

美緒 ……。

輝男 んなことよりメシだ、メシ。（美緒に）おい、行くぞ。

美緒 あ、ちよつと、待って……。

輝男 メシ、メシい。 （と、いい加減な鼻歌）

輝男、美緒、宴会場へ去る。

道子 ……他のみなさん、呼んできます。

洋輔 ああ、うん……。

道子、二階へ去る。

洋輔 じゃ、俺らも、行きますか。

直樹 あ、ねえ、洋輔くん……。

洋輔 (行きかけて) はい？

直樹 あの話、考えてみてくれた？

洋輔 あの話？

直樹 マサキのこと。

洋輔 ……。

直樹 やっぱり、本人にとつてもその方が、いいんじゃないかと思うんだよね。あ、気を悪くしないで聞いて欲しいんだけど……ほら、麻美ちゃん、家出したとき、うちでマサキのこと預かったら？ あのと看、マサキ、奈緒によく、なついてたし……ま、奈緒の方がマサキになつてたつて話もあるけど……。

洋輔 ……。

直樹 あ、もちろん、洋輔くんの逢いたいときに、いつでも逢ってもらってかまわないんだし……もし、その気があるなら、こういうことは早い方がいいんじゃないかと思うんだよね。マサキが小さいうちに……。ちよつと、真剣に考えてみてよ。

そのとき、二階から麻美、現れる。洋服のままである。

直樹 (麻美を振り返り) ……。

麻美 ……。 (会釈)

直樹 (会釈を返す。洋輔に) ……タクシー代、もうちょっと待って。どっかで崩してくるからさ。
洋輔 え？ ああ、はい…………。

直樹、洋輔の腕にポンと触れ、宴会場へ去る。

洋輔 ……。

麻美、無言で洋輔の前を通り過ぎようとする。

洋輔 ……おい。

麻美 (立ち止まり) ……。

洋輔 ……メシ。用意できてるって…………。

麻美 ……さつき、仲居さんに聞いた。(行くこうとする)

洋輔 ちよつと待てよ！

麻美 何？

洋輔 昼間、どこ、行ってたんだよ？

麻美 え？

洋輔 どっか、行ってたろ？

麻美 ……。どこだっていいでしょ？

洋輔 どうして言えないんだ？

麻美 (うんざりして) ……。

洋輔 なあ？ どうして言えないんだよ？ 何か、やましいことがあるから言えないんじゃないのか？

麻美 薬屋！

洋輔 それは知ってるよ。

麻美 え？

洋輔 ほんとに、薬屋、行っただけか？

麻美 ほんとに、それだけよ。

洋輔 だったら、なんで最初から、そう言わない。なんで誤魔化そうとする？

麻美 べつに、誤魔化してなんか……。

洋輔 現に今、俺が聞くまで隠してただろ?!
麻美 言えば言ったで、また疑うでしょう?!
洋輔 疑われるようなこと、するからだろ。
麻美 ……。

麻美、行こうとする。

洋輔 おい、待て! まだ話は終わってないんだよ。
麻美 あとにして。

洋輔、麻美の前に立ちはだかる。

洋輔 そこ、座れよ。
麻美 ……いい。
洋輔 座れって。
麻美 ここで聞く。
洋輔 いいから、座れ!

麻美
……。

と、二階から、浴衣姿の、奈緒、下りてくる。

奈緒 あ、洋ちゃん、ここにいたの。

洋輔 ……ああ。

奈緒 (麻美を認め) ……。

麻美 ……。(会釈)

奈緒 (洋輔に) 夕飯の用意できたって。

洋輔 うん、聞いた。

奈緒 うちの人、見なかった？

洋輔 直樹さんなら、先に宴会場へ……。

奈緒 なんだ。

洋輔 ……。

奈緒 洋ちゃんたちは？ 行かないの？

洋輔 すぐ、行くよ。

奈緒 そう……。

奈緒、宴会場へ去る。

洋輔 ……座れ。

麻美 ……。(座る)で、何? 話って。

洋輔 マサキのことだけど……。

麻美 え?

洋輔 や……駐車場でボール遊びさせるの、やめろよ。団地の住民から苦情、きてんだよ。

麻美 ……そう。

洋輔 近所に、公園でも何でも、あるだろ?

麻美 わかった。

洋輔 ……。

麻美 それだけ?

洋輔 え? いや……。

麻美、立ち上がる。宴会場へ去る。

洋輔
……。

と、玄関の引き戸を開け、ノーネクタイのワイシャツにスラックス姿の男が入ってきた。奥泉である。

奥泉
(なんとなく会釈)

洋輔
(会釈を返す)

奥泉
(奥に) すいませーん。ごめんくださいーい。すいませーん……。

洋輔
……呼んできましようか？

奥泉
え？

洋輔
宿の人。

奥泉
ああ……。

洋輔、奥へ去る。

と、二階から道子、駆け下りてくる。

道子
氷枕、氷枕……。

奥泉 あ、あの……。

道子、奥へ去る。

奥泉 ……。

と、階段上に、真緒、現れる。

真緒 誰か、救急車、呼んで！

奥泉 え？

真緒 救急車！

奥泉 はあ……。

と、真緒の背後に浩三、ふらふらと現れる。

真緒 ちよつと、あなた、ダメよ、横になってなきや！

浩三 ず……。

真緒 何？

浩三 水……。

真緒 水？ お水、飲みたいの？

浩三 お水……飲みたい……。

真緒 ちよつと待ってて。

真緒、二階の奥に去ろうとする。が、思い直し、階段を下りてきて、去る。続いて
浩三も、よろよろ下りてくる。

浩三 うう……。

奥泉 ……大丈夫ですか？

浩三、どっかとソファに座る。

浩三 (ぐったりして) ふう……。

奥泉 ……。

そこへ洋輔、戻ってくる。

洋輔　ちよつと宿の人、見あたりなくて……あれ？　浩三さん？

真緒、洗面器を手に戻ってくる。

真緒　（泣きそうな顔で）……こんなんしか、なかった。

洋輔　？

真緒　ほら、あなた、お水。……洋ちゃん。

洋輔　え？

真緒　手伝って。

洋輔　あ、ああ……。

真緒、洋輔、浩三に水を飲ませようとする。

浩三　（包帯の手をバタバタ振る）

真緒　何？　どうしたの？

浩三 (咳き込み) ……お、お……溺れる……。

真緒・洋輔 ……。

奥泉 私の車、出しましょうか？

洋輔 はい？

奥泉 手遅れになるといけないから。救急車呼ぶより、もし、あれなら……。

洋輔 ああ……や、でも……。

真緒 お願いします。

奥泉 今、こつちに車、寄せてきます。

奥泉、外へ去る。

雨の音。

浩三 うう……。

真緒 (浩三に) しっかりして。今、車、来るから……。

洋輔 (真緒に) もしかして、ハチ……？

真緒 たぶん……。

奈緒、戻ってくる。

奈緒 洋ちゃん、何してんのよ？ ごはん冷めちゃ……（うよ？ 浩三を認め）どしたの？！
洋輔 あ、姉さん。
真緒 この人、ひどい熱で……。
奈緒 え？ スズメバチ？
洋輔 たぶん。
奈緒 ええっ！？

車のエンジン音。玄関のガラス窓をヘッドライトが横切る。

洋輔 あ。来た。（奈緒に）姉さん、ちよっと手、貸して。
奈緒 え？
洋輔 病院、連れてくから。
奈緒 ああ……。

洋輔、奈緒、浩三に肩を貸し、両脇から支えて立たせる。

洋輔 (真緒に) ほら、姉さんも、行くよ。

真緒 うん。(行きかけて) あ……。

洋輔 何？

真緒 保険証……。

洋輔 ああ。

奈緒 いいのよ、そんなの。後で、どうにでもなるんだから。

真緒 そっか……。

奈緒 ほら、早く。

真緒 うん。

洋輔、真緒、奈緒、浩三、去る。

雨の音。

道子が、氷枕を手に現れ、あたふたと二階へ去る。

溶暗。

音楽。ラヴェルの「妖精の園」

同日、夜。

ソファで奥泉が缶ビールを飲んでいる。

テーブルの上には、オセロの盤が置かれたままになっている。
窓から月の明かりが差している。

奥泉 (ビールを飲んで) ……。

と、洋輔、奥から現れる。

洋輔 仲居さん、見あたりなくて……。もう帰っちゃったのかなあ。

奥泉 いいですよ。ツمامいなんか、なくて。

洋輔 そうですか？ (座る)

奥泉 ……大丈夫ですかね？

洋輔 え？

奥泉 浩二さん。

洋輔 ああ。大丈夫ですよ、あの人は。……ラヴェル、好きなんですか？
奥泉 え？

洋輔 車の中に、「ボレロ」のカセットテープが……。

奥泉 ああ……。あれは、妻の趣味で……。

洋輔 今日、奥様は？

奥泉 ……。

洋輔 家で留守番ですか？

奥泉 まあ……。

洋輔 心配なさいませんか？ 旦那が一人で、山登りなんて……。

奥泉 死にました。

洋輔 え？

奥泉 殺したんです、妻を。

洋輔 ……。

奥泉 オセロー。

洋輔 ？

奥泉 シェイクスピアの「オセロー」です。そっからきてるらしいですよ、このゲームの名前。

洋輔 ……ああ、なんだ。

奥泉 ……。(ビールを飲む)

洋輔 やりませんか？

奥泉 え？

洋輔 オセロ。

奥泉 ああ……。

洋輔、拳を突き出す。

奥泉 ？

洋輔 じゃんけん。先攻後攻、決めないと。

奥泉 ……いいですよ、野内さん、先で。

洋輔 そうですか？

奥泉 ええ。

洋輔 じゃあ。(駒を置き) ……どうぞ。

しばし、ビールを飲みながら、オセロゲームをする二人。

洋輔　こちらへは、よく、いらっしやるんですか？

奥泉　昔、一度、妻と……。結婚前のことですけど……。

洋輔　じゃあ、そのときも、この宿に？

奥泉　いえ。ここは、はじめてです。今日、たまたま、看板、目にして……。

洋輔　ああ、あの、ふもとの分かれ道？

奥泉　ええ……。

洋輔　そうですか。

奥泉　野内さんの番ですよ。

洋輔　あ、はい……。

奥泉　野内さんは？

洋輔　はい？

奥泉　ご結婚、されてるんですか？

洋輔　ああ、ええ……。もう、五年になります。

奥泉　そうですか。こちらへは、ご旅行に？

洋輔　いえ。除幕式で。

奥泉　除幕式？

洋輔　滝の上流に先祖の城跡があるんですよ。登山道、のぼりつめたところ。今は、ただの原っぱみ

奥泉　たいなもんなんですけど、昔は城の本丸だったらしいんです。そこに、親族でお金を出し合
つて石碑を建てようって、親父が言い出しまして……明日、その石碑の除幕式なんです。
へえ……。

洋輔　なんだかんだで十年がかりですよ。その間に言い出しつぺの親父は死んじゃって……。厄介
な遺産、残してくれたもんです。

奥泉　だけど、いい供養になったじゃないですか。

洋輔　まあ、そうだと、いいんですけど……。　（駒を置き）どうぞ。

奥泉　あ、はい……。

洋輔　奥泉さんは、普段、何なさってる方なんですか？

奥泉　カメラマンです。

洋輔　カメラマン？

奥泉　ええ。

洋輔　芸術家だ。

奥泉　あ、いや、おもに、週刊誌やなんかで……。

洋輔　そうなんですか。

奥泉　野内さんは？

洋輔　大学の教員です。

やや間。

洋輔 でも、どうして殺したんですか？ 奥さんのこと。

奥泉 えっ？

洋輔 その、オセロー。

奥泉 ああ……。

洋輔 や、シェイクスピアとか、そういうの、まるで専門外なもんで……。

奥泉 ……男ですよ。

洋輔 男？

奥泉 妻に男ができたんです。それで夫が嫉妬に狂って、妻の首を絞めたんです。もともと、思い過ごしだったんですけどね……オセローの場合……。

洋輔 ……。

奥泉 最後、妻に口づけしながら自殺するんですよ。

洋輔 なんて、そんな結末にしたんでしょう？

奥泉 え？

洋輔 だって、あんまり救われないじゃないですか。

奥泉 他に、どんな結末が？

洋輔 いや、それは……。

奥泉 今さら、結末を変えることなんて、できませんよ……。

道子、現れる。普段着に着替え、頭にオートバイのヘルメットをかぶっている。

道子 あれ？ まだ起きてらしたんですか？

洋輔 あ……、いた。

道子 え？

洋輔 お帰り？

道子 ええ、今日は、もう、あがらせてもらいます。明日、早番なんで。

洋輔 ああ。

道子 戸締まり、しちやっついていいですか？

洋輔 あ、うん。

道子、玄関の扉に鍵をかける。

奥泉 野内さんも、お休みになった方がいいんじゃないですか？ 明日、除幕式、朝、早いんじゃない

……。

洋輔 ああ……。

二階から麻美、下りてくる。

洋輔 ……どこ行くんだよ？

麻美 (答えず)

洋輔 麻美！

麻美 ジュース。

洋輔 風呂は？

麻美 あとで。

麻美、去る。

洋輔 ……。あ、今のが、妻です。

奥泉 ああ……。

道子 (外を見て) よかった。雨、あがって。(カーテンを閉める)

奥泉 ……(オセロの) 続きは、また今度の機会にしましょう。

洋輔 そうですね……。

道子 あと、やっときますから。いいですよ。

洋輔 あ、でも……。

道子 いいですよ。やっときますから。

洋輔 そう? 悪いね。じゃ、奥泉さん、お先に……。ほんと、今日は、いろいろありがとうございます。

奥泉 いえ。おやすみなさい。

洋輔 おやすみなさい。

道子 おやすみなさい。

洋輔、去る。

道子 お客様も、どうぞ、お休みになってください。

奥泉 うん……。

奥泉、去る。

道子、テーブルの上を片付けて去る。

誰もいない宿のロビー。

やがて麻美、戻ってくる。

麻美

(立ち止まり、玄関を振り返る。額を認め)……。五月待つ

花橘の香をかげば

昔の人

の袖の香ぞする――。

カーテンの隙間から、月の明かりが差している。

滝の音。

溶暗。

翌朝。

台風一過の晴天。

ソファに直樹と、奈緒。

奈緒 あんた、バツカじゃないの？！

直樹 ……大きな声、出すなよ。

奈緒 いつ、あたしが、あんたにそんなことしてって頼んだ？

直樹 ……。

奈緒 だいいち、いきなり、そんなこと言われて、洋ちゃん、どう思うと思うの？

直樹 だから、いきなりじゃないって。前から、それとなく話してきたことなんだから。

奈緒 ……。何、勝手なことしてんのよ！

直樹 だって、おまえだって言ってたろ？

奈緒 え？

直樹 あの二人、別れた方がいいって……。

奈緒 それとこれとは話が別でしょ！

直樹 じゃ、どうすんだよ？

奈緒 何が？

直樹 このまま治療続けてっても、子供授かる保証なんてないんだし……。少しは現実に目を向けろよ。

奈緒 現実？

直樹 俺たちだってそろそろ限界だろ？ 経済的にも、年齢的にも……。
奈緒 ……。

二階から輝男、美緒、現れる。

輝男 (腹を押さえて) うう……。

美緒 ほら、あなた、しっかりして。

直樹 ……どしたんですか？

奈緒 食あたり？

美緒 ううん。単なる食べ過ぎ。

奈緒 ああ……。

美緒 そうだ。奈緒ちゃん。お薬、持ってない？

奈緒 え？

美緒 正露丸か、なんか……。

奈緒 ああ……持ってきてたかな……。ちよつと探してみる。待ってて。

輝男 トーイェーにして。

奈緒 はい？

輝男 正露丸糖衣A。

奈緒 ああ……。

奈緒、「トーイェー、トーイェー」と、つぶやきながら二階へ去る。

直樹 輝男さん。(椅子を勧める)

輝男 うゝ……。 (座る)

美緒 あんなに無理して食べるから。

直樹 ほんと、輝男さんて、目先の損得にとられるタイプですね。

輝男 うゝ……。

畑山、現れる。

畑山 (しよんぼりと) おはようございます……。

美緒 あ、おはようございます。よかったですね、晴れて。

畑山 え？

美緒 雨、上がって。

畑山 ああ。(外に目をやり) そうですね……。 (元気がない)

美緒 ……どうかしました？

畑山 いや、どうもこうも……。

一同 ……？

畑山 つかぬ事をお聞きしますが、みなさん、「あさって」の次の日のこと、なんて言います？

一同 は？

畑山 「やのあさって」ですか、それとも「しあさって」ですか……？

そのとき、奈緒、二階から下りてくる。直樹の前にツカツカ歩み寄り、

奈緒 あんた！

直樹 え？

奈緒 何なの、これ？（と、ストリップのチラシを突き出す）

直樹 あ！

輝男 ……。

奈緒 〈あたしに会わずに帰っちゃイヤ〜で、あんたって人は、こんなときによくもまあ、ぬ

けぬけと……。

直樹 違う違う。

奈緒 バツカじゃないの？！

直樹 だから誤解だって……。ねえ？（と、輝男に助けを求める）

輝男 うっ！ また、波が……。

輝男、トイレに去る。

直樹 ……輝男さん……。

奈緒 ほんっと、もう、あんたには呆れ果てた！

直樹 いや、だからあ……。

奈緒、チラシをビリビリ破り捨て、

奈緒 もう知らない！（二階へ去る）

直樹 ……。（破れたチラシを片づける）

美緒 謝ってきた方がいいんじゃない？

直樹 え？

美緒 何があつたのか知らないけど。

直樹 や、ほんと、何も……。

美緒 謝っちゃいなさいよ。奈緒ちゃん、一旦ああなると、引っ込みつかなくなるの、知ってるで
しょう？

直樹 はあ……。

美緒 土下座でも何でもして。

直樹 え、土下座ですか？

美緒 ほら、早く。

直樹 ……。

直樹、 渋々、二階へ去る。

道子、 現れる。

道子 おはようございます。

美緒 あ、おはようございます。

畑山 ねえ、ミツちゃん。

道子 はい？

畑山 ミツちゃんは、「あさって」の次の日のこと、なんていう？

道子 「あさって」の次の日？

畑山 「やのあさって」？「しあさって」？ ……「やのあさって」だいね？

道子 ええ……。

畑山 だいねえ！ いうよね、「やのあさって」って。

道子 なんなんですか、ヤブカラボーに？

畑山 商工会の副会長が、東京じゃ「しあさって」だって言うんだに。東京の大学、行ってたから

って、都会人ぶっちゃってさあ！ 「やのあさって」っつーのは、「しあさって」の次の日

だって……。

道子 結局、畑山さん、何が言いたいんですか？

畑山 だから……今日の除幕式、商工会の副会長、来られないって。

一同 ええっ！？

美緒 どうして？

畑山 スケジュール「明日」で組んじゃったつて。それを俺のせいにするんだに！

一同 ……。

美緒 じゃあ、来賓の挨拶は？ どうするの？

畑山 どうしましょう？

美緒 ……。

道子 ったく、ツメが甘いなあ。

畑山 え？

道子 世が世なら、切腹もんだに。

畑山 切腹……。

道子 誰か代わりいないか、あたし、女将さんに聞いてみます。

道子、奥へ去る。

畑山 (切腹を空想し) ……。(腹を撫でる)

美緒 お腹、痛いのか？

畑山 あ、いえ……。

と、玄関の引き戸を開け、真緒、入ってくる。

真緒
おはよう。

美緒
あ、真緒ちゃん。除幕式、出られるの？

真緒
違う違う。保険証、取りにきたの。

美緒
ああ。

二階でドスンという音。

美緒
あ。

真緒
？

美緒
土下座した。

真緒
土下座？

美緒
で、浩三さん、どう？

真緒
え？ ああ。おかげさまで、もうすっかり熱も下がって……。念のため、もう一日入院させて、様子見ることにしたけど。

美緒 そう。よかった。

二階から、奈緒、下りてくる。
続いて直樹。おでこをさすりながら。

奈緒 あ、真緒ちゃん、おはよう。

真緒 おはよう。

直樹 おはようございます。

真緒 おはようございます。洋ちゃんは？ 上？

奈緒 あ、ううん……。

美緒 警察。

真緒・畑山 警察?!

美緒 麻美ちゃんの捜索願、出しに行ってるの。

真緒 えっ？

奈緒 麻美ちゃん、ゆうべ、また、いなくなっちゃったのよ。

真緒 ええっ! ……またあ？

美緒 奈緒ちゃんの言ったとおり。

奈緒 え？

美緒 二度あることは三度あるって。

奈緒 ああ……。

真緒 (何かを思い出し) ……。

奈緒 ……どしたの？

真緒 まさか、ね……。

奈緒 え？

真緒 ううん……。

奈緒 何よ？

真緒 ……今朝、病院で話題になったのよ。滝壺から、女の死体が上がったって……。

奈緒 死体？

真緒 うん……。

畑山 え、また、自殺ですか？

直樹 また？

畑山 や、実は多いんすよ、あの滝。役場でも、柵、高くしたり、いろいろやってんですけど……。

真緒 それが、首に、紐みたいなもので絞められた跡があったって……。

畑山 え？ じゃあ他殺ですか？！

美緒 こわっ！

直樹 ……え、ちよ、ちよっと待って。じゃあ……？

奈緒 え？

直樹 その死体が……？

真緒 まさか、とは思うけど……。

奈緒 ちよっと、やめてよ！ そんな、縁起でもない。

車のクラクション。

真緒 あ。ごめん。あたし、車、待たせてあるんだった。

美緒 奈緒ちゃん。

奈緒 ん？

美緒 正露丸は？

奈緒 あ……。真緒ちゃん。

真緒 (階段を上りかけて) ん？

奈緒 正露丸、持ってない？

真緒 え？

奈緒 正露丸。

真緒 ああ。あると思うけど。ちよっと待ってて。

真緒、二階へ去る。

畑山 あ。じゃ、お水を……。

畑山、奥へ去る。

奈緒 だけど、万が一、麻美ちゃんだったら……。

美緒 何が？

奈緒 滝壺の死体よ。

美緒 大丈夫よ。きつと麻美ちゃん、戻ってくるわよ。だって、二度あることは三度あるんだから。

奈緒 ちゃんが、自分でそう言ったんでしょ？
んん……。

輝男、腹をさすりながら戻ってくる。

輝男
う〜。

二階から真緒、片手に小さな鞆、片手に紙おむつを持って戻ってくる。

真緒
あ、輝男さん、おはようございます。

輝男
ん……おはよ。

真緒
奈緒ちゃん、これ。（と、正露丸を）

奈緒
ああ。（受け取り）はい、お姉ちゃん。（と、美緒に）

美緒
ありがとう。あなた。正露丸。

輝男
……糖衣Aって言ったのに……。

真緒
（姉妹に）じゃ、あたし、戻るから。麻美ちゃんのこと、なんかわかったら、病院に電話して。

奈緒
うん。

真緒
仲居さんは？

美緒
今、ちよつと……。

真緒
おっきい荷物、上にまとめといたから、預かってくように、仲居さんに伝えてくれる？

奈緒 わかった。

直樹 お大事に。

真緒 ありがとう。

美緒 気をつけて。

真緒 うん。じゃあ。

真緒、去る。

輝男 ……こんな山奥まで、何しにきたんだか、わからないな。

直樹 それも結果論ですよ。

輝男 そうだけど……うん。

畑山、コップの水を持って現れる。

畑山 これ。(と、コップを)

美緒 あ、どうもありがとう。ほら、あなた。(と、正露丸を)

輝男 ん……。 (鼻をつまんで飲む)

畑山 で、九州組の皆さんは？

直樹 夕方到着だった。

畑山 そうですか。寂しい除幕式になりそうだな……。

道子、戻ってくる。

畑山 あ、どうだった？

道子 今、現地に、南小学校のPTA会長に向かってもらってます。

一同 (顔を見合わせ) ……。

輝男 PTA会長？

美緒 商工会の副会長さん、除幕式、来られなくなっちゃったんですって。

輝男 ええっ、なんで？

美緒 やのあさってが、しあさってで。

輝男 は？

畑山 (力なく) ハハハ……。

輝男 ……なんだかわかんないけど、ま、よしとするか。副会長から会長に格上げになったっつーこと。

畑山 (腕時計を見て) ……あ。じゃ、すみません、皆さん。※そろそろバス、予定の時間なんで
…………。

輝男 ん。

奈緒 ※(直樹に) あんた。

直樹 (怯えて) な、何…………？

奈緒 ちよつとフアスナー、上げてくんない？ (背中を向ける)

直樹 ああ…………。(上げてやる)

道子 (畑山に) くれぐれも運転、気をつけてくださいね。

畑山 うん。

道子 山道、雨で滑りやすくなってますから…………。

畑山 わかってるって。よしっ！(と、自分の尻を叩く) じゃ、いっちょ気合い入れて、行きます
か！

直樹 あれ？ おまえ、カメラは？

奈緒 え？

直樹 ※※カメラ。写真機。

奈緒 知らないわよ。

直樹 知らないって…………預けたろ？

奈緒 預かってないわよ。

直樹 ええっ？

奈緒 何やってんのよ！

畑山 まあ、まあ、カメラなら、僕のが、ありますから。

奈緒 ったく……。

輝男 ※※あー、正露丸くせえ。だから糖衣Aって言ったのに。

美緒 贅沢言わないの。

一同、おしゃべりしながら、外へ去る。

静寂。

と、二階から、奥泉、下りてくる。

テーブルの上の新聞を読む。

道子、戻ってくる。

道子 あ……。おはようございます。

奥泉 (真剣なまなざしで新聞を読んでいる) ……。

道子 ……お客様……？

奥泉 (顔を上げ) え? ああ……おはようございます。

道子 いいお天気ですよ。お出かけにならないんですか?

奥泉 ああ……。

道子 滝には行かれました?

奥泉 えっ?

道子 車でしたら、すぐですから。是非ご覧になるといいですよ。なかなかミゴトな滝なんですか。

奥泉 ……そうですか。

玄関から洋輔、現れる。

道子 あ、お帰りなさいませ。

奥泉 野内さん……。

洋輔 あ……ゆうべは、どうも……。

道子 どうでした? 警察。

奥泉 警察?

道子 ! (まずいことを口走った?) ……あ、なんか、冷たいお茶でも……。

道子、去る。

洋輔 ……いいですか？　そこ。

奥泉 え？　ああ、ええ、もちろん……。

洋輔 （ソファに座り）……。

奥泉 どうしたんですか？

洋輔 どうもこうも……。

奥泉 ……。

洋輔 消えちゃったんですよ、あいつ。

奥泉 え？

洋輔 失踪したんです。ゆうべ。あの後……。

奥泉 ……奥さんが？

洋輔 ええ。

奥泉 どうして？

洋輔 わかりません。もう、何もわかりませんよ。

奥泉 ……。（立ち上がる）

洋輔 奥泉さん……？

奥泉 そろそろ、行かないと……。

洋輔 え？ 今日、発つんですか？

奥泉 ええ。

洋輔 でも、まだ、勝負、ついてないじゃないですか。

奥泉 勝負？

洋輔 オセロ。

奥泉 ……つけないでおきませんか。

洋輔 え？

奥泉 「お互い、「勝ち」の可能性を、残したままにしときませんか。

洋輔 ……。

奥泉 行きます。妻が、待っていますから。

洋輔 あ、ちよつと待ってください！

洋輔、帳場のカウンターからペンとメモ用紙を持ってくる。

洋輔 連絡先を……。

奥泉 え？

洋輔 連絡先、教えてください。滝と城跡を遊歩道で結ぶ計画があるんです。いつになるかわからないけど、その開通式の日、改めてここで勝負つけましょう。

奥泉 ……。

奥泉、連絡先を書いて渡す。

奥泉 はい。

洋輔 どうも。

奥泉 ……じゃ、お元気で。

洋輔 奥泉さんも。

奥泉 ……。(小さく頷く)

洋輔 ……案内状、必ず送りますから。

奥泉、玄関の引き戸を開ける。

と、足元で、蝉が、ジジジと鳴き声をあげ、飛び立った。蝉は不安定な軌跡を描き、澄んだ青空に小さく消える。

奥泉
(それを見上げ) ……。

そして振り返ることなく、去る。

洋輔、メモに目を落とし、丁寧に折りたたんでポケットにしまう。そしてソファに深く腰掛ける。

洋輔
(両手を握り、額に当て) ……。

滝の音。

溶暗。

翌朝。

道子、雑巾がけをしている。

と、二階でゴム鞆をつく音。

道子 (二階を見上げ) ……こら、ダメよ！ そんなところでボール遊びしちゃあ。

音、止む。廊下を走る子供の足音。

玄関の引き戸を開け、真緒、浩三、入ってくる。浩三の包帯は、ほとんど取れている。

真緒 おはようございます。

道子 あ、おはようございます。

浩三 おはよう。

道子 もう、大丈夫なんですか？

浩三 このとおり。驚異的な快復力だって医者も驚いてたぞ。

道子　へえー。

真緒　みんなは？　もう、帰った？

道子　あ、はい、今朝、お発ちになりました。

真緒　そう。

道子　残念でしたね。

真緒　え？

道子　除幕式。わざわざ遠くからお越しになったのに。

真緒　ああ、まあね。

浩三　ほんと、何しにきたんだか、ねえ。

真緒　どの口が言ってるの？

浩三　……。

真緒　あ、そうそう。仲居さん、これ。（と、ポチ袋を）

道子　はい？

真緒　少ないけど取っというて。

道子　あ、いえいえ……。

真緒　ほんの気持ちだから。

道子　でも……。

真緒 いいから。

道子 そうですか？　じゃあ、遠慮なく。（受け取る）

真緒 で、洋ちゃんからは、何か連絡、あった？

道子 いえ、まだ、何も……。

浩三 麻美ちゃん、どこの病院なの？

道子 隣町だそうです。滝の反対側。

浩三 そう。

道子 あのカーブ、しよつちゆうなんですよ。とくに雨の日は。あんまり大きな声じゃいえませんけど、実は昔、女将さんも、事故やらかしたこと、あって。駅にお客さん迎えに行く途中、宿のマイクロバスで、ガードレールに、どーん。

浩三・真緒 はあ。

道子 それまで下りの直線だから、ついついスピード出しちゃうらしくて……。

浩三 でも、まあ、麻美ちゃんも命に別状なくてよかったよ。レンタカーの修理代はバカにならないだろうけど。

道子 あ、どうぞ、おかけになってください。

浩三 。（ソファに座る）

真緒 （道子に）で、荷物は？

道子 はい？

真緒 うちの荷物。

道子 あ！ 二階に置いたまま……ただ今……。

真緒 あ、いいわよ。自分でやる。

道子 すいません……。。

真緒、二階へ去る。

浩三 ……で、どうだった？

道子 はい？

浩三 ゆうべの宴会。懇親会。

道子 ああ。

浩三 やっぱ、和太鼓なしじゃ、イマイチ盛り上がりには欠けたでしょ？ いや、ちよつと、責任感

じてんのよ。

道子 それが、すごーい盛り上がりで。

浩三 え？

道子 みなさんでカラオケ三昧。PTA会長なんかジュリーのメドレー歌っちゃって。これがめち

やくちや上手いんだ！

浩三 ああ、そう……。 (寂しい)

道子 あ、そうだ！ 高木様のご住所って、おわかりになります？

浩三 直樹くんの？

道子 奥様が、草履をお忘れになって帰られて。送って差し上げようと思ったんですけど、宿帳に、お名前しか書かれてなかったもんで……。

浩三 ああ。いいよ、通り道だから、俺、持って帰る。

道子 そうですか？

浩三 うん。

道子、 帳場のカウンターから紙袋を取り出す。

道子 じゃあ、これ。 (と、紙袋をテーブルの上に置く)

浩三 おう。

道子 すいません。

真緒、 荷物を持って下りてくる。

真緒 あなた、忘れもん、ない？

浩三 ああ。(時計に目をやり)そろそろ出ないと、電車、まずいんじゃないか？

真緒 そうね。

道子 駅まで車で、お送りしたいとこなんですけど、あいにく今、女将も番頭も出払ってて……。

浩三 いいよいいよ。そこでタクシー、拾うから。

真緒 どうもお世話様でした。

道子 こちらこそ、いたりませんで。これに懲りず、またのお越しを。

真緒 洋ちゃんたちのこと、よろしくね。

道子 あ、はい。

浩三 じゃ、行くか。(立ち上がる)

真緒 ええ。

道子 どうぞ、お気をつけて。

浩三 今日も暑くなりそうだなあ。

浩三、真緒、去る。

道子、玄関先で見送る。

道子 (深々とお辞儀) ……。

戻ってきて、そそくさとポチ袋の中を改める。

道子 二千元……。 (嬉しい) あ……。

テーブルの上に、草履を入れた紙袋が置き忘れられてある。

道子 (舌打ち) 使えねえなあ……。

と、玄関から畑山、現れる。

畑山 ミーツちゃん。

道子 (あわてて金を懐に入れる) ……。

畑山 何してるん？

道子 あ、いや、べつに……。

畑山 (紙袋を) 何、これ？

道子 何でもないです。(カウンターのの上に置く)

畑山 ……。ねえ、ミツちゃん。

道子 何ですか？

畑山 和太鼓なんだけどき。

道子 はい？

畑山 しばらく宴会場に置かせてもらって、いいかな？ 業者が遅い夏休みに入っちゃってさ。す

ぐに取りに来れないっつーんだに。

道子 困りますよ！

畑山 そこをなんとか……。

道子 ダメです！

畑山 ……。ミツちゃん、今、暇？

道子 暇じゃありませんよ。

畑山 ちよつとだけ。

道子 勤務中なんですから。

畑山 ふふふ……。いいのかな、そんなこと言っちゃって。

道子 え？

畑山 じゃじゃーん！ 中野サンプラザの、ニルヴァーナのチケット！

道子 え？！ どしたん、それ？（と、タメ口で）

畑山 まあ、俺の人脈を駆使すれば、こんなもんだに。

道子 すげー。

畑山 欲しい？

道子 もちろん！ あたし、取れなかったんですよ、チケットぴあ、ぜんぜん電話、繋がなくて……。

畑山 じゃあ、今回だけ、特別に。

道子 マジっすか？！（チケットを受け取り）

畑山 その代わり、太鼓……。

道子 ああ……まあ、隅っこの方に寄しといてもらえれば。

畑山 寄しとく寄しとく。

道子 わー、なんか、今日はツイてんなあ。……あ、そういえば、ゆうべ、懇親会で言ってた話って、ホントですか？

畑山 何？

道子 滝から城跡まで、遊歩道を整備するって。ホントなら、通勤、楽になって、嬉しいんだけど。

畑山 ああ。まあ、今度の選挙で、誰が町長になるかにもよるけど……いずれにしろ、まだ、ず

つと先の話だに。五年後か十年後か、あるいはもつと……。

道子　なんだ。気の長い話ですね。

畑山　だね。

道子　その頃、あたし、何してんのかなあ？　まだここで、仲居やってんのかなあ？

……（チケ

畑山　何？

道子　チケツト、二枚もいららないんですけど。

畑山　一枚、俺の分だに。

道子　……。

畑山　さて、と。ちつと便所、借りていい？

道子　ああ、どうぞ。

畑山　ミツチャン、ミチミチ……。　（続きをハミング）

畑山、歌いながら去る。

道子　……。　（その背中を睨む）

道子、掃除に戻る。と、テーブルの下に藁半紙を認めた。

道子 ……（それを拾い上げ読み上げる） ……開式の儀、修祓しゅうはつの儀、降神の儀、献饌けんせんの儀、除幕の儀…

道子、式次第を帳場のカウンターに置く。
玄関の戸を開け、洋輔、現れる。

道子 あ、おかえりなさいませ。

洋輔 （後ろを振り返り） ……何やってんだ？ さつさと来いよ。

道子 ……。

麻美が松葉杖をついて現れる。片足にギブスをしている。

道子 大丈夫ですか？（手を貸そうとする）

が、洋輔がそれを制す。

道子 え……？

洋輔 ちよつと二人にしてもらえる？

道子 や、でも……。

洋輔 (麻美を見つめ) ……。

麻美 ……。

道子 ……はい……。

道子、会釈し、奥に去る。

洋輔 座れよ。

麻美、ソファに座る。

麻美 いッ……。 (痛みに顔をゆがめる)

洋輔 バカだよ、おまえは。

麻美 ……。

洋輔 何度同じ間違い繰り返せば気が済むんだ？

麻美 ……。

洋輔 どこへ逃げるつもりだったんだ？ また、あいつのどこか？

麻美 違うわ……。

洋輔 じゃあ、どこだよ？！

麻美 ……。

洋輔 最初からそのつもりだったのか？

麻美 え？

洋輔 ここ、来る前から、逃げ出す計画だったのか？

麻美 ……。

洋輔 答えたくないなら、答えなくていい。だけど、これだけは言っとくぞ。おまえみたいなやり方じゃ、どこへ逃げたって……。

麻美 あなたこそ……。

洋輔 何？

麻美 ……。

洋輔 何だよ？ 言いたいことがあるならハッキリ言えよ！

麻美 あなたこそ、いつも、そのやり方。

洋輔 何だよ？ 俺のやり方って。

麻美 「答えたくないなら、答えなくていい」だとか、そうやって、最初に、相手に選択肢を与えておくの。自分の責任を逃れるために。

洋輔 ……あ？

麻美 寛大さを装って、そういうアリバイづくりをするのよ。

洋輔 何、言ってるんだ？ おまえ、自分のしたことわかってんのか？ おまえのせいで俺と親父の

十年間が全部台無しになったんだぞ！

麻美 だったら、あたしたちの五年間は？

洋輔 何？

麻美 この五年間の結婚生活を、あなたは、どう考えてるの？

洋輔 ……俺がおまえに何をした？ え？ 何したっていうんだよ？

麻美 臆病者。

洋輔 何？ 今、なんて言った？

麻美 臆病者！

洋輔、思わず手をあげる。

麻美

……。

洋輔

(しかしその手を下ろし) ……。

麻美

ほらね。

洋輔

え？

麻美

殴ることさえできない。

洋輔

……。

麻美

あたしは、あなたと「出会った」んだと思ってた。でも、あなたにとっては、そうじゃなかった。

洋輔

何を言ってるんだ？

麻美

結局あなたは教師の立場で、生徒の一人を「選んだ」だけなのよ。

洋輔

同じことじゃないか。

麻美

同じじゃない。

洋輔

同じことだろ。

麻美

全然違う！ あなたは、まだ、あたしに出会っていない。

洋輔

……わからないな。ちっともわからない。

麻美

あたしは、今、やっと、わかったの。

洋輔 何が？

麻美 あたし、今まで間違ってた。

洋輔 今さら……。

麻美 別れます。

洋輔 聞き飽きたよ。

麻美 あなたと、別れます。

洋輔 ……何？

麻美 このままじゃ、二人とも駄目になる。

洋輔 ……。病気だよ、おまえは。可哀想に。

麻美 ……。

麻美、松葉杖をついて立ち上がる。

洋輔 どこへ行くんだ？

麻美、無言で階段に向かう。

洋輔 待てよ！

洋輔、麻美の前に立ちはだかる。

麻美 (立ち止まり) ……どいて。

洋輔 無理だろ、一人じゃ…。

麻美 どいてって言ってるの！

洋輔 俺は、おまえのためを思うからこそ…。

麻美 そういう言い方やめて！

洋輔 ……。無理だって！

洋輔、麻美の腕を掴む。

麻美 放して！

麻美、腕を振り解く。その拍子に、よろめき、床に尻餅をつく。

麻美 ……。

洋輔 (麻美を見下ろし) ……。

洋輔、麻美に近寄り、手を伸ばす。
麻美、その手を松葉杖で払う。

洋輔 (手を押さえ) ……。いいのか、それで？
麻美 ……。(洋輔を、キツとした目で見上げ) ……。
洋輔 ……。勝手にしろ！

洋輔、玄関へ。
と、真緒、戻ってくる。

真緒 あ、洋ちゃん……。ちよっと、どこ行くの？
洋輔 ……。滝を見るに。
真緒 え？

洋輔、外に去る。

開け放たれた戸から流れ込む滝の音。

真緒 麻美ちゃん……。

麻美 ……。(小さく会釈)

真緒、麻美に手を貸し、立たせてやる。

真緒 大丈夫？

麻美 ……すいません……。

麻美、再びソファに座る。

真緒、カウンターの上に紙袋を認め、それを手に取る。

真緒 ねえ、麻美ちゃん……。

麻美 はい。

真緒 洋ちゃんのこと赦してあげて。洋ちゃん、ときどきキツイ言い方することあるけど、決して悪気はないのよ。

麻美 ……わかってます。

真緒 ちゃんと二人で帰ってくるのよ？ ね？ いい？ ちゃんと、洋ちゃんと二人で……。

麻美 あたしには、あの人を赦す資格が、ありません。

真緒 何言ってるのよ？

麻美 ありがとうございます。わかってくれるのは、お義姉さんだけです。

真緒 麻美ちゃん……。

麻美 真緒さんがいてくれなかったら、あたし、あのととき、きっと泣いてた。

真緒 あのととき？

麻美 「飼い犬に手を噛まれた」って言われたとき。

真緒 ……。

麻美 もう無理なんです。あたし、あの人とは、もう……。

真緒 じゃあ、マサキはどうするのよ？

麻美 あたしなんかいい方いいんです！ あの子のためにも、あたしなんか……。

真緒 甘えたこと言わないで！

麻美 ……。

真緒 そういふ人だと思わなかった。

麻美 え？

真緒 そうやって悲劇のヒロイン、やっつけてればいいわ。だけど、あたしを、あなたの「物語」に勝

手に取り込まないで！ ……あなたの引き立て役をやるつもりはないの。

車のクラクション。

真緒 ……行くわ。

麻美 ……。

真緒、去る。

静かに玄関のドアが閉められる。

静寂。

麻美 ……。

麻美、階段へ向かう。

と、階段上から赤いゴム鞆が転がり落ちてきた。

麻美
……？

麻美、鞆を拾い上げ、階段の上り口へ行く。

麻美 (二階を見上げ、微笑む) ……いい？ ……いくよ？ ……それっ！

と、鞆を放り投げた瞬間、暗転。

滝の音、高鳴る。

すべての「時」を飲み込むように――

滝の音、やがて小さくなると、音楽。ラヴェルの「眠りの森の美女のパヴァーヌ」

エピローグ

夜。

窓から月の明かりが差す。

男が、ソファで、オセロゲームの盤に目を落としている。

男
（思案して、鼻をかく）……。

ちらと外に目をやる。そしてそっと、駒に指を伸ばす。

と、二階から女将、現れる。

女将
お布団のご用意、できましたから。

男
（手を引っ込め）あ……どうも。

女将
オセロですか？

男
ええ。

女将
（盤を覗き込み）あら。真っ黒……。

男
……。

と、玄関から女、缶ビールを手に現れる。

男 あ、わかった？ 自販機。

女 うん。

女将 雨、上がってます？

女 ええ、すつかり。(男に) はい。(と、缶ビールを)

男 ああ、ありがとう。(受け取る)

女 あれ？(と、盤を覗き込む)

男 ……何？

女 ズルしてない？

男 え？ ……バカ。何言ってるんだよ。んなこと、するわけないだろ。

女 ホントに？(怪しむ目)

男 ホントだよ。(女将に) ねえ？

女将 さあ。

男 ……(女に) ていうか、おまえの分は？

女 ん？

男 ビール。飲まないの？

女 ああ、懇親会で飲み過ぎちゃったから。畑山さんが、しつこく勧めるんだもん。

女将 (真似て) 「畠山重忠」の「畠山」……ではなく、土佐の畑山温泉の、畑山です。似てる！

女将 でしょう？ もう、何百編、聞かされたことか。

男 土佐の人なんですか？ 畑山さんて。

女将 いいえ。生まれも育ちも、この町ですよ。

男 ああ……。

女将 なんか、おつまみ、お持ちしましょうか？

男 あ、いえいえ……。

女将 あっ、そうだ！ あれ……。

と、女将、奥へ去る。

男 …… (ビールの栓を開け) 何、話してたの？

女 ん？

男 懇親会で、畑山さんの奥さんと。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女
あぁ……。
なんか、ずいぶん、盛り上がってたじゃない。
若い頃の、あなたのおかあさんと、そっくりだって……。
え、誰が？
あたしが。
……俺の、おふくろと？
うん。
なんで、あの人がおふくろのこと、知ってんの？
昔、この宿で仲居してたんだって。畑山さんの奥さん。
あぁ、そうなの……。

男、一口、ビールを飲む。

男 女 男 女
結局、いらっしやらなかったわね。
ん？
お義母さん。
……まぁ、最初から、来るとは思っていないから……。

女
……。

滝の音。

女将、お盆に小鉢を載せて戻ってくる。

男
あ、なんか、すいません。

女将
いえいえ。お口に合いますか、どうか……。

女将、小鉢を置く。

男・女
！

男
……な、なんですか、これ……？

女将
蜂の子の佃煮です。

男
ああ……。

女将
どうぞ、召し上がってみてください。あ、奥様も、どうぞ。

女
あ、いえ、あたしは……。

女将
まあまあ、そうおっしゃらず。美味しいんですよ？ 栄養もあるし。ちよつと、見た目は、

あれですけど……。

女将、蜂の子をひとつ、自分の口に放り込む。

女将 うくん！（納得の味）

女 ……。あ、そうそう、女将さん。

女将 はい。

女 つかぬ事を伺いますけど……。

女将 はい？

女 昔、あの滝で、殺人事件があったって本当ですか？

女将 え？

女 の人が首を絞めて殺されたって……。

男 ……。

女将 誰に聞いたんですか？

女 畑山さんが……。

女将 ……もうっ！ほんっと、あの人は、余計なことをへらへらへらへらへらへら……。

女 え、じゃあ、やっぱり……。

男 無理心中だろ？

女 え？

男 翌朝、旦那が奥さんの後を追って、滝に……。

女 知ってたの？

男 昔、親父から聞いたことがある。

女 そうなの……。

女将

新聞でもけっこう大きな記事になりましたねえ。この宿にも、お巡りさんが来て、あたしもいろいろ聞かれたんですよ。お風呂場の裏で、凶器の……ほら、何ていうんですか？ カメラの、こういう、首にかける紐みたいな……ストリップ？

女

え？

男

ストラップ？

女将

あ、そう、それぞれ。その、ストラップが見つかって……。

女

この宿の、お風呂場で……？

女将

ええ。うちのお客さんだったんです。

女

そうなんですか……。

女将

ここだけの話にしといてくださいね。よそでは、絶対……。

(人差し指を唇に当てる)

女

あ、はい……。

女将 あーそーだ、お風呂！（額をパチンと叩く）お風呂掃除まで、あたしがやらなきゃならん

だわ。（溜息）失礼いたします。あ、佃煮、召し上がってくださいね？

男 え？ ああ、はい……。

女将 あーあー、まったく、もう……。

女将、愚痴りながら、去る。

滝の音。

女 やっぱり、一口、ちょうだい。

男 え、チャレンジすんの？（と、小鉢を）

女 違う。そっち。

男 ああ。

男、女に、ビールを渡す。

男 （オセロの駒を置き、黒を白にひっくり返す）……おまえの番だぞ。

女 うん……。 （駒を置き、白を黒にひっくり返す）

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

そこ、きたか。

……放さないでね。

ん？

あたしのこと。

(笑い) 急に何、言ってるの？

約束して。

(おどけて) ……放さないよお。

(と、駒を置き、黒を白にひっくり返す)

(真顔で) 殺さないでね。

(手を止め) え？

(男を見つめ) ……。

……悪い冗談、よせよ……。

(微笑み) こころも。

ああ……。 (黒を白にひっくり返す)

じゃあ……。

女、駒を置く。

男 女 男 女 男 女 男 女 男

あ……。

(大量に、白を黒にひっくり返し) 「角」取ることに、こだわりすぎなのよ。……はい。

(盤を見つめ) ……。

もう一度、最初からやる？

え？

もう置くとこないわよ。

んん……。

じゃ、最初からもう一度。今度は、マサキが黒ね。

ああ。

若い夫婦は新たにゲームをはじめ。

音楽。ラヴェルの「水の戯れ」

音楽、高鳴り、溶暗。〈幕〉

参考文献

- 『野内氏・月居氏のふる里 月居城の歴史』
青山辨著（札幌企画出版）
- 『頭の体操 第一集』
多湖輝著（光文社知恵の森文庫）
- 『オセロー』
シェイクスピア著・福田恆存訳（新潮文庫）
- 『伊勢物語（上）——全二巻——』
阿部俊子著（講談社学術文庫）